

第6回個別化医療研究会
抗がん剤の個別化医療
Individualized medicine for cancer therapy

開催趣旨:

治療の最適化は、患者の遺伝的背景・生理的状態・疾患の状態に基づく個別化医療を通じて行われる。製薬企業はコンパニオン診断薬開発を含め創薬、開発、市販後調査において個別化医療を推進している。医療現場では個別化医療のために、バイオマーカー発現の有無の診断、病期分類に基づく治療方針の選択、リスク分類に基づく有害事象の予防、投与量の個別化などが行われている。今回は、抗がん剤治療にフォーカスをあて製薬企業および臨床の立場から議論を深める。

モデレーター: 中村 光浩 Mitsuhiro Nakamura

岐阜薬科大学 医薬品情報学 Laboratory of Drug Informatics, Gifu Pharmaceutical University

1. 確かな情報を患者さんの価値に変えて: 肺癌と血液癌を対象とした分子標的薬開発を事例として**日高 和幸 Kazuyuki Hidaka**

アステラス製薬株式会社 メディカルアフェアーズ本部 メディカルサイエンス部

Medical Science, Medical Affairs, Astellas Pharma Inc.

悪性腫瘍（癌）は、遺伝子のさまざまな変化が原因となり発生する。近年、それら遺伝子変異の解析が著しく進展し、がん細胞などに特異性の高い分子標的薬の開発が推進され、癌の薬物治療はめまぐるしく進歩している。今回は、弊社にて臨床開発中の肺癌及び血液癌を対象とした分子標的薬の事例を個別化医療の視点から紹介する。

2. 個別化医療に向けた抗がん剤・診断薬の開発と将来の展望**田窪 亮子 Ryoko Takubo**

中外製薬株式会社 Chugai Pharmaceutical co., ltd

がん領域では、分子標的薬の開発とともに、近年、免疫チェックポイント阻害薬を中心としたがん免疫療法が登場し、癌の遺伝子変異や免疫病態に基づいた治療の選択等の個別化医療への動きが高まっている。今回は、分子標的薬及びがん免疫療法とそれらの診断薬の開発について紹介するとともに、治療・診断の複雑化に伴い、NGSやリキッドバイオプシーを用いた次世代PHCへの挑戦について触れていきたい。

3. 臨床現場からみた個別化医療の実際**中村 光浩 Mitsuhiro Nakamura**

岐阜薬科大学 医薬品情報学 Laboratory of Drug Informatics, Gifu Pharmaceutical University

体表面積はヒトの生理機能と関係が深く、臨床現場で多くの抗がん剤の投与量の調整に用いられる指標である。本邦で使用されている抗がん剤を対象に、添付文書の投与量調整に関する記載を調査した。DuBoisの式、藤本の式、高比良の式、Boydの式、及びMostellerの式などの種々の体表面積算式の使用に際して、臨床で陥りやすいピットフォールを紹介する。（抗がん剤の投与量調整における体表面積算出式の調査、癌と化学療法誌、2017、印刷中）